

「10周年の開架室を歩いて考えたこと」

(中央図書館開館10周年記念誌 の原稿から)
中央図書館・地域情報センター設計者 寺田芳朗

2012年10月6日、開館10周年の君津図書館開架室を歩いた。懐かしい方々と挨拶し豊かに成長を続ける資料世界に驚きながら、この図書館づくりから学んだことごとをあらためて大切な経験として思い出していた。「図書館とは建物ではなく生涯に学習を支える仕組み」ととらえ20年BMで地域を廻った正統な図書館員がいて、活発な公民館活動史を持つ君津の希有な社会教育政策が、市民と共に後ろ支えしてきた事実。図書館づくりの序章である施設プロポーザルコンペ以前の積み重ねられた事実こそ全国の先頭を切って走る「図書貸出利用実績」や、図書館への市民的共感の「いま」の種子がある。そしてコンペ。審査委員団が7人の提案者達に問うたことは・・・。

- ・これからの時代の図書館は、どうあるべきか。IT導入でどう変わるのか。
- ・地域情報センターとはなにか。図書館とどう役割分担し複合し合築するのか。

時代の風は、県に全教育長を集めて識者に講義させた。「今の時代にまだ図書館を造る自治体がある。その予算で一家に一台パソコンを配れば事足る。」PCがあれば全ての資料情報が座ったまま無料で手に入るはずだという発想だ。著作権に無知でも12年を経た現在を見れば真っ赤な嘘だと今ならわかるだろう。さらに、図書館でなければ出来ないこともある。開架の環境を逍遙(ブラウジング)する効用。一冊の本や断片の情報だけでなく、知識世界の全体や関係性を感得し、隣にある本、現物資料、多様な人々とも出会い、自分を確かめ、地域社会と一緒に変化成長してゆくことだ。



そこで提案の中心に「開架資料の配列をマトリックスに構造化すること、これに対応して環境を構成する。」とした。百貨店フロアの周辺に専門店群が並ぶイメージだ。さらに二階に奥座敷のように、10万冊の公開書庫を置き、資料世界を二倍に広げて、快適な個人席や打合わせ席、野外テラス席を配置した。私たちが過去に試みた福岡県苅田町や佐賀県伊万里市の図書館の利用形態を、館員の方達と視察し研究工夫した。

君津では、学校図書館との連携や市史編纂の取り組みにも、他市には無い工夫蓄積がある事も知って驚いた。これら継続的研究と交流のたまり場は、図書館こそが資料と共に提供すべきとして3階西側に設えた。いずれ長い眠りから覚める時が来よう。

さて、国の縦割政策と補助金制度の下で、日本で造られ始めた地域情報センター。欧米では図書館の技術革新分野の一部として展開され、私達も幾度か見学してきた。情報加工制作/ドキュメンテーションの「技術リテラシーや、場と装備の提供」を、人と資料情報の交流蓄積のセンターである図書館から切り離れた日本の先例視察ではPCを陳列しただけのゲームセンター化して成長も展望も見られなかった。君津では中心市街地活性化のリーディングプロジェクトであり、ここでの市民協働の活動や創作されるコンテンツについても、行政各課の共同プロジェクトチームで議論とまとめが行われたことも思い出す。運営は市民参画の委員会式、2施設の複合合築ではなく「全体がひとつの図書館」として君津市民に奉仕したいと計画設計をして完了した。

それにしても、幾度も皆で話し合った。「図書館は何のためにあるのだろうか」と。「人は何の為に学ぶのか」と。情報を他人より早くたくさん手に入れる為ではない。市民ひとりひとりが「おだやかで豊かで知足した今」を故郷と共感して確かめる場がこの君津図書館でありたいものだと、もういちど考えた。(寺田大塚小林計画同人)

